



阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

6月例会報告（2017年6月18日開催）

聖書研究 イエス・キリストと旧約聖書の預言

今年も暑い夏がやってきました。小さいころから夏が好きでしたが、今は修養会も夏の楽しみの一つに加わりました。三鷹の静かな修道院のなかで学ぶ時間と、修養会が終わった後、井の頭公園を散策しながら帰宅の途につく時の満足感のようなもの。

国の内外では様々なことが起き、また自然災害も猛威を振るっていて、私たちも無関係ではいられません。時にはこういう時間も必要だと思えるようになりました。

古屋先生が赴任してはや4か月になろうとしています。これから新たな歩みが刻まれると思いますが、信友会もその一歩に加わり、活動していきます。 (Y. O)

「イエス・キリストと旧約聖書の預言の関係」

古屋治雄先生

新約聖書に見られる旧約聖書の引用は多数あり、それらは福音書に限らず、使徒言行録、パウロの書簡、共同書簡などに散見されます。皆さんは引照付き聖書をご存知と思いますが、これは牧師の専用ではなく皆さんも使用することができます。2000年にわたり古今の学者たちが調べ上げた旧約聖書からの関連記事を蓄積したもので聖書理解にとって有用です。特にマタイによる福音書はイエスの誕生から記載されているからでもあり、旧約聖書の引用が25件と多くみられます。

皆さんは今日すでにクリスチャンとして聖書を学んでいますが、今回はテーマに即してあえて2000年前のユダヤの民の中に身を置いて主イエスが登場された物語を見ることによってユダヤの伝統的理解とは違った理解ができると思います。

イエスの誕生の預言

イエスの誕生の箇所である1章23節では、『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』この名は『神は我々と共におられる』という意味である。』インマヌエル預言は、イザヤ書7章14節にあり、「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ」。そして17節には「主は、あなたの民と父祖の家の上に、エフライムがユダから分かれて以来、臨んだことのないような日々を臨ませる。アッシリアの王がそれだ。」と言います。ここでは、インマヌエルが誕生しても単純に民族の救済を約束していません。イザヤは王族と

対等な預言者であり、危機の中にいる民に警告する立場であります。「インマヌエル」なる王が生まれても、北王国には救いは到来せず、アッシリアにより滅亡させられたのです。救世主はここではユダヤ民族を救済するのではなかったのです。また、ここでのおとめは若い女性であるが処女降誕を示していません。北王国の滅亡は紀元前8世紀でイエスの誕生までは700年も遡らなければなりません。

次に、ルカによる福音書にある、マリアの賛歌についてみると、1章46節から55節で受胎告知を受けた後に洗礼者ヨハネの母になるエリザベトを訪問し、エリザベトから祝福を受けた時に答えたのが有名な「マリアの賛歌」です。これは、エレミヤ書第33章14節～15節が引用されます。「見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。」第1イザヤの時代から150年後のユダ王国が滅亡し、バビロンへ捕囚されて50年ごろの預言者エレミヤの預言ですが、ここでもバビロンによるユダ王国の滅亡、民族の有力者たちのバビロンへの50年の捕囚があり、ペルシャ王キュロスによりイスラエルへ帰還が許可されたのです。ここでも裁きの後に平安が与えられます。神は、安請け合いではなく厳しい裁きの後に平安を保証しています。

主イエスの公生涯

公生涯のイエスについては、マルコによる福音書は第1章3節の洗礼者ヨハネの預言で、「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。荒野で叫ぶ者の声がある。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ』」。これは、イザヤ書第40章3節にある、「呼びかける声がある。主のために、荒野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。」が引用されています。イザヤ書は、1章から39章までが第1イザヤが、40章から55章までが無名の「第2イザヤ」が、56章から66章も無名の「第3イザヤ」の預言が伝えられています。第2イザヤはバビロン捕囚時の預言者であり、ここではイスラエルへの帰還の喜びを歌っています。40章1節では、「慰めよ、わたしの民を慰めよとあなたたちの神は言われる。」50年の苦難の時を終えてイスラエルに帰る喜びではあるが、50年の捕囚であれば世代は変わり、故郷の様相も変わっています。聖書の救いの歴史は何百年という長いスパンの中で進んでいます。しかしその長い時間の中でも約束が果たされてゆくのです。

イエスの十字架上の死

イエスの十字架の出来事では、使徒言行録第8章32節以下で、エルサレムでのデアスポラのキリスト教信者の迫害から逃れたフィリポが、ガザへ行く途中に出会ったエチオピアの高官に行った宣教があります。出会ったとき、高官がイザヤ書53章7節～8節の部分を読んでおり、この部分は誰の事かと尋ねま





す。フィリポは、このことが十字架上で死んだイエスのことであり、イエスの福音について告げると高官は福音を受け入れたので水のあるところで洗礼を授けました。このイザヤ書第53章7節～8節は「苦難の僕」としてキリスト教にとって最も大切な箇所です。「苦役を課せられて、かがみ込み、彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように、毛を切る者の前に物を言わない羊のように彼は口を開かなかった。捕らえられて、裁きを受けて、彼は命を取られた。彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか。わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり命ある者の地から断たれたことを」。イエスの死の600年前にこの預言は書かれました。キリスト者にとっては光ですが、旧約聖書全体の中では極めて異質な箇所とされ、誰のことを示しているかもわからず、この僕の姿が待望するメシアの姿であるなどとは想像もできなかったのです。

バビロン捕囚後のユダヤでは、王国は認められず、第2神殿の再興は認められたのでユダヤ民族の誇りを持って民族の形ができました。ユダヤ民族は、旧約聖書のモーセ五書を中心に備えて、律法を守り、割礼を受けて安息日を守るなどユダヤ的アイデンティティーを備えて民族的絆のもとに生きてきたのでしょう。ローマの支配の中で、人々は不安やみじめな生活の中で強力なメシアの到来を信じる信仰をもって待っていたのです。

この人々がイエスをメシアの到来として当初は皆で歓迎し、政治的経済的にユダヤを救う救世主として期待したのです。弟子たちもそのような期待をもってイエスを見ていました。しかしイエスはそのような期待には組しないで、十字架への道を歩み死んでしまいます。当時のユダヤ人にとって苦難の僕の預言はメシア到来には関係のない預言だったのです。みじめな王はいらないと考えました。

イエス・キリストの復活

しかし、主イエスの出来事の中でメシアの預言に関して最も決定的となったのは、イエスの復活です。これは特に弟子たちにとっては天と地がひっくり返るほどの出来事でした。復活後のイエスが弟子たちと出会ってくださり、復活の事実には圧倒されたのです。

イエスの復活に出会った弟子たちは、イエスが救世主であることに気が付きます。そしてイエスの復活の事実から遡って聖書の読み直しを始めます。復活されたイエスはどのように死なれたか。その死はどのようなものであったか(十字架上の死)。十字架で死なれた主イエスは地上にある時には何をなさったか(公生涯)。それは癒しの奇跡、指導者たちとの論争、これまで誰も行ったことのない驚くべき教えなどでした。地上で様々な活動をされた主イエスは、そもそもどのようにしてこの世に出現したのか(イエスの誕生)。そしてクリスマスの言い伝えも確認されたのです。

初代のクリスチャンたちは、主イエスの復活に圧倒されて聖書を改めて読み始めます。

従来のユダヤ的な聖書の読み方ではなく、新たな視点から学び直します。その結果当時の主流にないものから福音のイエスに繋がる預言がなされていたことに気が付きます。

ユダヤ的には旧約聖書は、モーセ五書、預言書、諸書の分類で読まれますが、キリスト教では、救いの歴史(救済史)として聖書を読み、キリストの復活から遡ることにより、預言書などを通して救世主としてのキリストを位置づけ、滅びの預言からキリストを見出し、イエスの十字架の死が、ユダヤ的には知られなかったイザヤ書53章の「苦難の僕」に辿り着いたのです。ルカによる福音書24章27節では、復活のイエスは、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていると説明しています。

また、パウロの伝道を通してキリスト教が律法などユダヤ的伝統から解放されたことにより、ユダヤ人でなくともすべての人々がキリスト教信仰に与ることができるようになったのです。

(文責:玉澤武之)
